

アメリカ自然食品協会全国大会に参加して

小田急電鉄 旅行部
近藤 節夫

□NFAの組織

この6月私は、アメリカの自然食品協会(Natural Food Associates、以下NFA)の1975年全国大会に参加する機会を得た。もとより、自然食品および有機農法に関しては、アメリカが日本にくらべて、はるかに先進国であることは十分承知していたが、素人の私が、実際にその実態をうかがい知り、同時に全米各層の同協会員と知りあうチャンスを得たことは望外のしあわせであった。

大会は6月18日(水)~21日(土)の4日間、ルイジアナ州シュリーブポート市(Shreveport)で開かれた。今回私がこの大会に参加することになったきっかけは、有機農業研究会の熱心な会員で、同僚でもある八木朝男氏の強い勧めがあったからである。そして協会への事前の連絡は一切、彼がやってくれた。それにしても大会への参加を決めたのが、あまりに唐突であったために、十分な準備ができていたとはいえなかった。ただ、私なりに僅かの日程の中で狙った目標は、ほぼ達せられたように思うので、自然食品、有機農法に関心をもつ一個人の報告ということで、多少なりとも参考になれば・・・と思っている。

アメリカにおける自然食品および有機農法の状況、ならびに啓蒙運動については、ロデール父子の業績を通して、つとに知られているところだが、特に横断的な組織、またはその組織の運動については、あまり我が国にも紹介されていない。

南部テキサスの一小都市にすぎないアトランタ(ジョージア州アトランタではない)に本部をおく協会は、全米50州、海外32か国に、その数1万を

越える会員をもつ。毎年開かれる全国大会の他に、州ごとに大会も開かれる。会長のニコルス博士(J. D. Nichols)を中心に、1953年シカゴでその産ぶ声をあげた。当時「食生活を良くすることによって、自らの生活を向上させていく」ということに関心をもつ人びと、特に、自らの体験からこの運動に強い信念をもったニコルス博士は、その結成に積極的に参画した。従って会員には医師、歯科医、大学教授、評論家など、健康について一家言をもつ専門家から農民、サラリーマン、学生など、ありとあらゆる階層の人びとが参加しており、その運動ぶりも多岐にわたっている。

□PRも抜け目なく

会場に充てられた人口20万人のシュリーブポート市シビックセンターにある公会堂には、講演会場および展示場が隣り合わせになって、前者には600人分の座席と、食事ごとに有機農産物を提供する‘Shiloh Farm’の長いテーブルがおかれていた。展示場には25店ばかりの出店があり、これはこれで結構参加者の目をひいていたし、休憩時間には、私にとって格好の見学の場となった。

4日間にわたる大会の中心は、ニコルス会長をはじめとする専門家諸氏の講演や講義であった。これに若干余興的行事もあったし、第三日目午後には、会場からアトランタの本部へバス旅行も企画されていた。会員を協会の本部へ招いて、実際に自分たちの施設を見てもらうことも協会のひとつの大きな目的であったし、そういう点では、PRの面でもなかなかスマートで抜け目のなさを感じた。

大会のおぜん立てや進行は、NFA の優秀なスタッフが如才なく、かつ精力的に動いて運ばれていたが、やはり表面的にはニコルス会長の陣頭指揮と会長のよきパートナーであるトム・ラービン氏 (Tom Lavin) のエンターティナーとしての力量が、ともするとテーマからしてアカデミックに傾きすぎるきらいのある、大会の雰囲気一般の参加者にも親しめるものにした点で、評価してあげたいと思う。

本大会の参加者は約 500 人で、全米各地から各層の会員が集まった。私は出発前に、日本からも私以外にも若干の参加者を予想していたが、日本はおろか、海外からの参加者は、私ただ 1 人という、完全に[全米国内大会]に終始した。

しかし、いずれにしろ、この分野での、国際的な連携が十分でない現状はあるにせよ、海外からの参加者がまったくないというのは、少々意外な気がした。

□講演のテーマ

さて、18 日から始まった大会期間中、午前 2 時間、午後 3 時間、夜 1～2 時間のスケジュールで、講演が行なわれた。講演のおもなテーマは、「食品添加物」、「自然食料理法」、「死亡率上昇は飲料水の人工的フッ素添加物に関連がある」、「社会生態学におけるニューフロンティア」、「ビタミン B6」、「癌」等々だった。

参加者がこれに積極的に加わる機会としては、最終日に行なわれた「癌」に関するセミナーや、ややトリッキーであったが、T. ラービンのたくみな司会による参加者のための展示品のオークションが印象に残る。私には、すべての講義を完全に理解するということはできなかったが、一番強く印象に残ったのは食物汚染にふれ、とくに水俣病に言及され、その話しぶりも明快で、諄々と諭すように語るハンター女史 (Beatrice Trum Hunter) の講演であった。私は、ある晩ハンター女史と夕食をともにしながら、水俣の有機水銀中毒について話し合ったが、その博識ぶりに、自分の不勉強を反省させ

られた。女史は、ニュー・ハンプシャー (New Hampshire) のヒルズボロ (Hillsboro) の出身で、「自然食品料理法」、「毒のない菜園」など、数冊の著書がある。ふだんの話しぶりも実に魅力的で、適度にユーモアを交え、人間的にもあたたか味がある。また、「エコ・アグリカルチュアの事例」について報告したエーカー紙 (Acres U. S. A.) 編集長チャールズ・ウォルターズ氏 (Charles Walters, Jr.) は、著名な農業専門紙を発行しているだけに、ジャーナリスティックなスピーチをされ、参加者に感銘を与えた。

私にとって、もうひとり印象に残っている講師は、「ビタミン B6」について、専門的な解説をされた J.M. エリス博士 (John M. Ellis) であるが、博士は最後の「癌」セミナーでは、スライドを使って、癌患者の生々しい手術の事例について説明された。セミナー終了後、壇上には、感動した熱心な質問者が押し寄せたほどであった。

□若い会員が少ない。

会長のニコルス博士をけじめとして、大会の講師は、アメリカでも著名な医師を中心に選んでいる。これも会員、あるいは、今大会参加者の興味や関心が、自分の健康であることを見事に反映している。実際、私が参加者に聞いて回った限りでは、割り合いにいわゆるスネにキズをもつ人が多い。完全な有機農産物愛好者である彼らも、実は、自分の体験から、これらの農産物を食生活に採り入れることに気づいた人たちだといえる。そのせいでもあるまいが、やはり年輩者が多い。この点については、スタッフの一人も卒直に若い会員の獲得に努めていると認めていた。

私は、幸いにして、自然食品に関心をもつ多くのアメリカ人に会い、卒直に話し合って意見を交換することができた。特に、すべての講師とも親しく話しあうことができた。とりわけ二日目の朝、会長のニコルス博士が、私を自然食品に関心をもつ遠来の特別参加者として、壇上から紹介をしてくれ

たことが大きい。大会後、ワシントン州をはじめとして、いくつかの州大会にも招待をうけたほどである。

□NFA本部へ

第三日目、私も参加前から楽しみにしていたアトランタにある本部へのバス旅行が行われた。シュリーポートから 58 マイルである。アメリカ南部の裕福な地方都市を通りながら、1時間半ほどでアトランタに到着した。少し誇張して言わせてもらうなら、たとえようのない美しい環境のなかに本部の建物はあった。国道をはさんで、レンガ建ての平屋建物の周囲は、美しい芝でかこまれ、その前に清澄な湖があり、南の方には、ごく最近オープンしたばかりの 156 エーカーの実験農場 (Demonstration Farm) があり、ちょうどインゲンや、ジャガイモが収穫されていた。国道を横切った北側には、面積 186 エーカーの鬱蒼たる原始林 (Natureland とよんでいる) が、それらは主に、松やヒイラギなのだが、それがまだ、あまり手が入れられないままになっている。そしてここもツアー用のトラクターでじっくり見せてくれた。ここで昼食(もちろん自然食品)もサービスされた。建物内には書店、印刷所もあり、訪れる利用者の便宜に供している。すでにふれたように、NFA の幹部としては、参加者にこの本部を紹介することも重要なプロジェクトのひとつだが、会長を始めとする全スタッフ、更にごく自然に、ボランティアを買って出る会員の献身的なサービスぶりは、NFA の性格を象徴的に具現しているようにみえた。

□個人の寄付に依存

NFA の運営については、1万をこえる内外会員のわずか5ドルの年会費と、あとは完全に寄付に頼っている。これら以外には、書籍の発行などで多少まかないながら、他方で、会員に「Natural Food and Farming」というA5判の月刊誌を提供し、

同時に全米 50 以上の自然食品店で販売している月刊誌「Natural Foodnews」も発行している。寄付というものにあまりなれない我々の俗っぽい見方でいえば、どうみても赤字としか見えないのだが、それでいて立派にやっているのはアトランタの銀行経営者であり、かつ病院も経営する医学博士のニコルス会長の物心両面にわたる援助に依存していることは、間違いのないようだ。事実、本部の土地、建物も相当部分が、会長の個人資産だという。

その寄付についてだが、最終日の朝食会席上、再びT・ラービンに、日本からのお客様として紹介される光栄に浴したが、その際、寄付の集め方を披露してくれた。この日 NFA の主旨に共鳴して寄付をされる希望者の申し込みを、満場の中で行ったのだが、1,000 ドルから始まり、まず5人の申し込みをうけた。徐々に金額を下げ、私の見たところ、その場でざっと1万ドル以上の申し込みがあったようだ。このように、日本ではあまり例のない運営方法がとられていた。

□会場での展示

会場で展示された展示品についても若干記してみたい。会場が、南部のルイジアナ州という土地柄から、比較的近辺の南部の Farm が参加していた。会場の食事を一手に引き受けていた「Shiloh Farm」も隣りのアーカンサス州にある。Shiloh Farm は、三度の食事の他に、ホットドッグやアイスクリーム店も開いて、かなり賑わっていた。だいたい自分たちの収穫物を展示、販売していたが、なかには、水清浄器、ジューサー、鋤物性土、あるいは輸入の朝鮮人参、コンフリー、ビタミンの錠剤なども展示され、参加者も休憩時間には、ツマミ食いをしながら、あちらこちらで小さな議論を戦わせていた。

一般的に、日本に対する関心の度合いはかなり高い。これは、参加者全般について言えるのだが、蜂蜜業者であるフロリダの「Tupelo Farm」の支配

人は、特に日本に強い関心を示し、現在日本国内に販売代理店をさがしていると話していた。

ところで展示場内で私の目をひいたのは、“Wonder Life”の小冊子や展示品だった。

アイオワ州にある“Wonder Life”は、創立者の“Wonder Life Idea”という4つの哲学上の信念に基づき、(1)生産、(2)販売、(3)健康食品の啓蒙、を経営的に見事に実践している。農場を営する‘Wonder Life Corporation’と、主として栄養剤(ビタミン C、E、レシチン、カルシウム、鉄分、植物性蛋白質など)を販売している‘Wonder Vita Corporation’、及び、‘Vitamir’が生産と販売を受け持つ。この三社に、総合的に関連をもち、更に‘Wonder Life Idea’を強く、広く、啓蒙しているのが、‘The Wonder Life Sowers Association’という会員制の組合組織である。この組合は、もちろん、さりげなくPRに努めてはいるが、主目的は、会員に健康食品に関する資料、情報を提供して、その生活向上に資するという発想である。会員には、季刊誌を発行、また‘Wonder Life’と提携しているいくつかの農場を訪問するためのガイドブックなども発行している。この辺の発想は、余りにも営利本位の日本の業者には、どう頭をひねっても浮んでこない。

□大会最終日の行事

最終日の行事は私にはもっとも楽しかった。前述の朝食会にひきつづき、ラービンの司会による展示品のオークションが続けられていく。展示された自然食品をセリ売りする光景は、日本ではとても想像できないであろう。

最後に、「癌」セミナーが、約3時間にわたって続けられた。参加者の関心は、やはり一番強かったようだ。特に質問が多くてさばききれず、質問者はそれぞれ講師のもとへ押し寄せて、個別に質問するありさまだった。

□NFAとNNFA

アメリカの自然食品に関連のある横断的な大きな組織としては、そのほかに、カリフォルニアに本部をおく、「全国栄養食品協会」(National Nutritional Food Association、以下 NNFA)という組織があり、同じように、活発に運動を進めているようだが、NFA とは、やや行き方が違うようだ。NFA は、ニコルス博士の自己の医学的見地から食物、特に、自然食品、および有機農法に重点をおいているが、NNFA は、体育上の肉体鍛練を重点的なモットーにしている。ただし会長ホールダビー博士(H. W. Holderby)以下、かなりの役員が、NFA の役員を相互に兼務している。その点では、両者は密接な連絡をとっているようだ。

□おわりに

大会参加者には夫婦づれが多かったが、真剣に講義に耳を傾け、ほとんどの参加者がメモを取り、私語をかわすものは1人もいない。その勤勉さ、行儀の良さには感心した。また、自然食品を興味本位ではなく、自分たちの健康上の信念から愛好するようになったいきさつからして、健康問題には、格別深い関心をもっており、そのひとつの証左として、会場で喫煙している人をまったく見かけなかった。講義の内容としては、医学、健康、公害問題がほとんどで、話題は常に、これらに集中していたが、私としては動物性蛋白の主要供給源である「魚」に関して、ハンター女史が、水俣問題に言及した時を除いて、まったく話題にのぼらなかったのは、やや意外であった。

それにしても、日米の農業構造上に差はあるにしても、アメリカでは、自然食品が少数派としてではなく、現実にも企業としても成り立ち、経済的にも堅実な発展をしているようである。

そしてアメリカでも無機農法が、明らかに多数派ではあったが、あくまで有機農法は、ひとつの伝統的な農法として引き継がれ、現在改めて見直されているという感じがした。